NOT FOR
PUBLIC RELEASE

SM小説

共用淫虐妻千春

きょうよう
いんぎゃくづま
ちはる

新版

「小説十二階」を改稿
全面加筆修正

あんぷらぐ
荒縄工房

NOT FOR
PUBLIC RELEASE

共用淫虐妻（きょうよういんぎやくづま）・千春（ちはる）

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ノじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。二〇一九年「あんぷらぐど」に改名。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

設定と主な登場人物　9
千春という名のメス犬　11
調教契約　21
最初のレッスン　36
テスト　53
清掃奉仕　73
ペットルーム　87
夢に見る光景　101
アナルフィスト　110
汚れたジャージ　124
トレーニング　139

NOT FOR PUBLIC RELEASE

NOT FOR PUBLIC RELEASE

ゴルフボール　１５４
淫らな姿で　１６８
管理人の情報　１７８
童貞処理　１９２
苦痛の目覚め　２０２
報打ち　２１６
仕上げの蝋涙　２２７
安全ピン　２３７
早朝の特訓　２５１
朝のおでん　２６６
肉体奉仕　２７９
小便器　２９３

NOT FOR PUBLIC RELEASE

隣人からの苦情　３０６
罵倒されながら　３１９
謝罪　３３７
ンの牙　３４９
ス犬宣言　３６４
楽への狂詩曲　３８０
わりなき絶頂　３９２
黒の世界へ　４０２
界まで　４１６
折檻の朝　４２９
ゴンとの再会　４５４
恥辱の挨拶　４７８

思い出のドレス　５０６
夜遊び　５３７
管理組合の処分　５７１
状態の検査　６０８
因縁の魔力　６４４
披露目　６７８
説明会　７０３
用物の初日　７３３
かさず殺さず　７８１
捻れた関係　８１２
残酷な使役　８３９
燭台の夜　８６６

NOT FOR PUBLIC RELEASE

見られながら感じて　890
拷問遊戯　909
餌食　931
裏切られていく　965
不意を衝く　991
懲罰　1017
不性　1044
処理　1069
初夏　1089
奥付　1105

NOT FOR PUBLIC RELEASE

設定と主な登場人物

舞台は東京近郊。江戸時代には宿場町の女郎屋、その後赤線と呼ばれる売春宿となり、一九五八年頃からは平成まで料亭だった建物の跡地に建つマンション。十階建て。五十世帯の規模。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

私（木村健助）　七十代　遊郭の経営者の子。マンションの共同オーナーの一人。

長谷川千春　二十六歳　長谷川達也の事実上の妻であるが、戸籍上では達也の父親の養女となっている。

長谷川達也　三十五歳　実業家。

大森啓一　五十六歳　マンションの管理人。料亭の使用人だった。

松田俊夫　二十二歳　２０４号室の住人。大森に万引きを目撃され、脅されて千春の調教を記録する役割に。

植木勇　四十八歳、真知子　三十歳　住人。ペットのゴンを愛でる。

立花[illegible]　八十八歳　マンション管理組合の理事長。杉村の[illegible]った遊郭の客でありのちに共同経営者となった。没落した明治時代の大富豪の末裔。

夏美　二十歳。千春の実の妹。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

本作はＰＤＦ版「小説『十二階』の第一部、第二部を改稿・改題したものです。

千春という名のメス犬

私の住むマンションは、五十世帯が住む小ぶりな十二階建てだ。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

いっとともいい部屋は最上階にある。ルーフバルコニーがつき、東、南、西から陽光が入る。太陽はまだ東から出て南へと向かっているところで、二十畳近いリビングは真冬でもサンルームのように暖かい。

このソファーに、女がいた。これから語る幻想の中での出来事のような話の主人公だ。

「口に長さ二十センチのディルドを飲ませています」

真っ白な肌。細い顎の線が崩れるほど大きく口を開

かされている。真っ黒な精嚢を思わせるディルドの根本が突き出ている。

丈夫な黒いゴムバンドがその上を通過して、女の首の付け根まである黒髪を巻き込んで、後頭部にまわっている。吐き出せないばかりか、喉を少しでも動かせば、さらに奥に入り込もうとするだろう。

両手は背中に回され、乳房の上下をはさむようにして厳しく縛り上げられている。手首は首の付け根付近まで高く絞り上げられていた。

そこに汗に濡れて乱れた髪がべっとりと重なる。

両足は百八十度に開かれて、左右に伸びきった足首にロープが巻き付き、ソファーの下を潜って弛みなく

NOT FOR PUBLIC RELEASE

NOT FOR PUBLIC RELEASE

固定されていた。

「どうですか」

この部屋の主人、長谷川達也に問われて、私は「うん」と答えるしかなかった。

奥様は、いくつなんですか？」

二十六になりました。千春と言います」

かわいそうですな、千春さん。物のように扱われて…。どうして、こんなことに？」

最初からそういうのが好きだと言ったんですよ」

長谷川は、三十代半ばの頭の切れそうな男で、体格もいい。

ソファーに全裸で縛り上げられている妻の千春は、

若く、美しい肌をし、真っ黒な髪を染めもせず、古風ながら美しい顔立ちをしている。

彼の奥まで器具で塞がれて、眉間に皺を寄せ、苦しそうに顔を歪めているところが一層美しい。

三十代となってしまった私から見れば、被虐趣味があるとはいえ、痛々しく見える。

それは偶然の出逢いだった。

のマンションに最近、越して来た長谷川夫妻を、三階の小部屋でひとり暮らしの私が、たまたま目撃してしまったのである。

夜明け前だった。前夜からの冷たい雨が残っていた。うっかりしてゴミを出し忘れていたことを思い出し、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

朝三時半に目が覚めてしまい、それから気になって仕方がなく、寒いことは承知でオーバーを羽織って、ゴミ袋を手にマンションの駐輪場に併設されているゴミ置き場に行ったのである。

駐輪場からゴミ置き場までは、屋根がないので傘を差さなくてはならない。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

ゴミを捨て戻ろうとしたとき、駐輪場の影から、人影が現れ、びっくりしてたじろいだ。

それが越してきたばかりの長谷川と千春だとわかるにはしばらく時間が必要だった。街灯に照らされた二人。長谷川は傘を差していたが、千春は全裸で体に縄をかけられ、四つ這いになって、雨の降る中を犬のよ

うに歩かされていた。
このときも、声が出ないように、黒いディルドを喉の奥まで押し込まれていたことをあとで知る。暗がりでは口になにかをくわえていることしかわからなかった。まさか、喉の奥まで達しているなどとは思わなかった。
「なんだ、お前」と私は普通に声を出していた。
驚いたのは長谷川と千春だ。
特に千春は、脅えたように彼の後ろに逃げる。首輪と鎖がついていることを、かえってはっきりこちらに見せてしまったようなものだ。
「すみません。お恥ずかしい」と、彼は冷静に挨拶し

NOT FOR PUBLIC RELEASE

た。おかげで私も落ち着く。
「私たち夫婦のことなので、見なかったことにしていただけませんか？」
「はい。まあ私だって、そういうことにかけては承知いますから、口は堅いですよ。ただねえ」
「んでしょう」
「れじゃ、奥様に甘すぎる」
「ういうことでしょう？」
「えね。メス犬の散歩で、その程度じゃ、奥様は満足しないでしょう」
すると彼は傷つけられたような顔をした。
「私だって、この妻に巡り会うまでは、何人も調教し

NOT FOR PUBLIC RELEASE

てきたんですよ」
「そりゃそうでしょう。あなたは若い。体力も十分におありでしょう。それでも、こういうメス犬は、物足りないものなのです」
それでも彼は余裕を取り戻した。
「ほーん。まさか、あなたは、お詳しいと？」
のあたり、昔、華やかな頃があったのです。私は女郎屋で産まれたんです。昭和三十三年に赤線廃止になってちょっとした料亭になりました。そしていまじゃ、こんな風にマンションになったわけでね」
「そうだったんですか。このマンション、昔は女郎屋だったんですか……」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「それも、普通のものじゃないんです。かなり特殊なお女郎さんばかり集めていたんです。場末でしたからね。吉原のような立派なところが天国なら、ここは地獄ですな。奥様のような美しい女性をいたぶる嗜好の客ばかりでね。それは哀れでした……。これもなにかの縁でしょう。私でお役に立つことなら、お手伝いいたしましょう」

「それはすばらしい。ぜひ、お願いします」

それが今朝のことだった。

長谷川は、さっそく私を自宅に招いてくれたのだ。

日当たりがよくて、眠気さえ誘うような最上階に。

「うかがいたいことがありまして」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

NOT FOR
PUBLIC RELEASE

彼は若い。それでいて落ち着いてる。どうやら女だけではなく年寄りの扱いもうまいらしい。あとでわかったが、学生時代からＩＴを主とした事業を手広く経営しているそうだ。お金儲けに加えて、人の心を掴むこともうまいのかもしれない。

長谷川は予定していたメス犬の散歩をし、千春をひとめした上で風呂に入れてやり、軽く食事をさせ、待っていたのである。

羽しが千春の肌を輝かせている。

と通りのことは、してきたわけでしょうね？」

「ん。千春とは、三年ほど前に会いました。就活で会社の面接に来たんです。それからゆっくりゆっくりと時間をかけて、睨んだ通り、こうした世界が好きだとわかったので、ほら、こうして」

長谷川は、壁にかかった額縁を見せた。そこには笑

NOT FOR PUBLIC RELEASE

顔で全裸の千春の写真と、奴隷誓約書が入っていた。
真っ赤なまん拓が押されている。
ご主人様を得て幸せいっぱいの奴隷。
あのとき、こいつは処女でしてね。処女をいただくときに、これもいただいたんです」と自慢をする。
なるほど。それはお楽しみだったでしょう。正式に結婚を？」
犬の養女にしています。つまり私と兄妹ってことですよ。私は今後、誰かと結婚するかもしれませんから」
「賢明ですね。メス犬と結婚するなんて、あり得ません。まして社長さんならね」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

そして彼は、ようやく、ソファーの千春の横へ行く。
「なかなかでしょう。痩せすぎず、太りすぎず。乳房はこれでもまったく手を加えていません。いずれ整形しようもっと大きくしようかとも思っていますが」
「いろいろプランがあると」
「だねえ、今朝、杉村さんに言われたことが、すごくになっているんですよ」
「それは失礼しました」
「私はまだ甘いんでしょうかね」
私は笑った。
「こういう女をすっかり理解するなんて不可能ですよ。あなたが好きなように調教すればいいんです」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「そんなものですか？」
「じゃあ、どうしたいんです？　まさか、彼女が自分でなりたいようにさせてあげようとでも？」
「うーん、そう言われてしまうと……」
大丈夫。長谷川さんは、なかなかいいご主人ですよ。人ものメス犬を扱ってらしたのでしょう？　そして、このメス犬が一番のお気に入りってわけでしょう？」
「いえ。それは自信があります。千春は得難いメスです」
「だったら、もっと大胆にやってみてはいかがですか」
「大胆に？　そこのさじ加減が難しい。やっていいこ

NOT FOR PUBLIC RELEASE

NOT FOR PUBLIC RELEASE

奥付

お読みいただきありがとうございました。

〇二二年十一月初版　二〇二〇年九月改訂二版

〇二二年四月改訂三版

著作権　あんぷらぐ（荒縄工房、あんぷらぐど）

荒縄工房の情報は左記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」　●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室　●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。